

# 生活者としての成長

——二葉亭四迷の悲劇にもふれて——

宮本百合子

青空文庫



三四年前、いろいろなところで青年論がされたことがあった。

そのときは、現実の社会生活と文化との間にヒューメンなもの  
可能を積極的に見出してその成長や開花を求めてゆこうとしてい  
た日本の精神のあらわれの一つとして、多くの可能をひそませて  
いるはずの人間の青春、青年が評価され直したのであつたと思う。

このごろまた雑誌や演説で、ひどく青年は呼びかけられている  
し、激励されているし、期待するところ大なりとされているので  
あるが、あのとときの青年論とこの頃の青年へのよびかけには、ど  
こがちがったところがある。

何故なら、三四年前青年の人生への価値、未来への期待が語ら

れたときには、主として青年が自発的に自分の存在の意義を発見して、この歴史の進歩と人類のために役立つてゆく美しさについて語られていた。ところが、近頃はめいめいは自発して自己の価値を自覚しなければならぬという表現よりも、「諸君は」と、一括した青年群として呼びかけられ、一括した精神と行動との必要に向って注目することを求められている。そして、その声は大変大きくつよく響いているのだけれど、現実には、この間、『都新聞』に詩人の萩原朔太郎氏の書いていられたような青年の無気力という現象があらわれてもいる。

ここに極めて入りくんだ現代の青春の問題が潜められているのではないだろうか。呼びかけの声はちょうど往来を私どもが歩い

ているとき頭の上で聞こえるラジオのラウド・スピーカアの声となつて空に響いてはいるけれど、それに交る電車の音、群衆の蹠音もあつて、何となし心にずーつとしみこんで来ない。語られてゐることに種々様々の疑問があつて、それをただしたいにも時の流れの瀬音は騒然としていて、そんなしんみりとした時間のかかるものの追究のしかたは昨今はやらないという気風もある。そういうところに一言や二言で云いつくし現しつくせない若い精神の苦悩があるのではないだろうか。

この間安倍能成氏が一高の校長となつたときの何かの談話で、現代の青年はさまざまの外面的な慰安を求め代り、友情に慰安

を求めよ、という意味を云われたということを引きいた。安倍さんという人は漱石門下の一人で、昔は「大思想家の人生観」というしごく彪大でわかりにくい本の翻訳などもやり、今なお老いて若い心があつて、青年の大先輩として思いやりのあるひとの一人であらう。友情に慰安を求めよ、と云う言葉のなかに若い胸にふれて来る暖かさがあるだろうと思える。友情にしろ人間成長の過程では実に波瀾のあるもので、直接に生活態度を反映する点では恋愛とひとしい。その人それぞれの人となりや好みや属している社会の圏やそれらの境遇上の条件に対するそのひとの態度などというものを総合的に反映しているものである。友情に慰安を求め得るために、人は先ず信頼に足る人物でなければならず、理解力の

ひろく明るい精神のもちぬしでなければならず同情という能力をもたなければならぬ。わからないところはどこまでもわからし  
て行こうとする真摯な真面目さをもった人間でなければ、決して  
永続性のある成長のためのよろこびと協力とにみちた友情は持つ  
てゆけっこないのである。そのこともやはり恋愛の真髄にふれて  
いる。

安倍さんの言葉は、或る価値をもってある種の青年の心をめざ  
ましたろう。大学というところを就職のための段階という風に考  
えている若い人も相当あつて、それらの人たちは就職線に向つて  
は互に競争者の関係におかれるのだから、そのような人間関係の  
なかに健全な友情の生い立とうはずもない。ただ通り一遍の学生

のつき合いがあるにとどまる侘しきがある。そういう心に向つて、友情を慰安とせよ、と云われた声は、何か新しい関心を誘つたことではなかつたらうか。

だが、友情というものも、その他の人間の多様な愛の感情と全く同様に架空に抽象に存在はしないから、やっぱり相結ばれる心と心とは共通な人生への態度、現実への理解の一致がなければならぬ。その点で、友情を慰安とするということは、決して気分的な問題に止る性質でなくなつて来る。また野心と野心との共同作業というものでもあり得なくなつて来る。野心の結合では、一方の野心が充足されたときまたは野心の傷けられたとき、たちまち友情は破れるのである。



今日の若い心は、自分たちの間にそのような友情が見出される可能を、どの程度信じているだろうか。ここに青年たち自身の今日の課題があるのではないだろうか。学校を出る、すぐ兵役の義務に服する、そのとき既に友達は八方に散るのである。三年ぐらいはたちまちその条件のうちで経過する。その三年間就職しつづけた人々と、新たにそれから後に就職する人との間にはおのずから隔たりがあるのが普通である。安倍さんの青年時代のように、学校生活につづいて研究の時間がのびやかに前途に展<sup>ひら</sup>けていないのが今日の青年の生活が歴史からうけている条件である。世俗にみて就職がおくれることを問題としなくても、学問上の研究をそ

の間途絶えさせることもある。

現代の若い心は、さげがたいそれ等の義務に直面していて、雄々しくそれを果していると思う。戦争が世界的な規模になって来ている今、若い世代は次第に沈着にめいめいの運命を担って最善をそこにつくしてゆく健気な心になっている。友情もそれらの波瀾を互の人生的なものとして凌いで行こうとするその雄々しさと思いやりとで結ばれて行くように変化しつつあると思う。友情も新しい形でその可能を見出されつつあるのである。

青春というものは誰にとつても経過する人生の一時期であるけれども、その経過のしようによつては、歴史が全く夥しい人々の青春を単に消耗するという結果になる。この事実を、人々はどうか

考えているだろう。一人一人の青春のおのずからな経過と歴史の力がそれを消耗してゆくこととの間には同じでないものがある。それを人々はどう感じているだろうか。この関係はもとより今にはじまったことではなくて、人類に社会生活が形づくられたはじめからあるわけだが、歴史の特殊な激動期にこの関係は非常に緊張して来る。或る種の人々はその緊張のために思考する力を喪つて、より強烈な需要に自分の生活を吸収されつくしてしまう。経験が歴史の推進にとって重大な価値をもつのは十分な自覚と観察と判断と結論とが種々様々な思考と行動との間からまとめられて来るからであろう。そのとき一つの歴史が生きて経過され体と精神とによってためし験されるということが出来るし、人間として

歴史に働きかけてゆく能動の力が生じるのである。

どんなに歴史が強烈に動いても、それは人間の動きから発するものであるということは明らかなのだし、そうとすれば、人間の義務はあらゆる場合に、歴史に消耗されつばなさず、歴史に働きかける力としてめいめいが存在しなければならぬことにあるのではないだろうか。そして、この歴史に働きかける力としての存在の姿に、いろいろ私たちを考えさせるものもあるわけである。

明治文学の歴史を少しでも知っているものは、二葉亭四迷という作家の名の価値を否定しないだろうと思う。二葉亭四迷は明治二十一年に小説「浮雲」を書いて、当時硯友社派の戯作者気質のつ

よい日本文学に、驚異をもたらした人であった。硯友社の文学はその頃でも「洋装をした元禄小説」と評されていたのだが、そういう戯文的小説のなかへ、二葉亭四迷はロシア文学の影響もあって非常に進歩した心理描写の小説「浮雲」を、当時は珍しい口語文で書いたのであった。

文学を真面目に考えていた少数の人々は二十四歳であった二葉亭のこの作品から深刻に近代小説の方向を暗示された。坪内逍遙が戯曲と沙翁劇の翻訳に自分の一生を方向づける決心をしたのは、この二葉亭の小説の深い芸術の力にうたれて、小説家として自分の天質のうちにある浅薄さを知ったためであった。逍遙は率直に自分でそのことを書いている。

ところが、文学の仕事というものは明治二十年代の日本で、硯友社が繁栄を極めていた程度の遊戯性で一般からみられていて、作家が歴史に負っている責任をその文学的業績のうちに見るといふような水準まで来ていなかったから、二葉亭の作品は一部に高く評価されつつ、一般受けはしなかった。何しろ文学を愛する奴なんぞは、くたばってしまえと親爺から怒鳴られた思い出によつて、長谷川辰之助は二葉亭四迷という筆名をつけたというような時代であつた。

二葉亭の苦悩は、文学というものがもし現在自分のぐるりに流行しているような低俗なものであつていいのならば、文学は男子一生の業たるに足りないものであるということにあつた。二葉

亭自身は、人生と社会とに何ものかを齎し、人々に何かを考えさせ感じさせる「人生の味い」をふくんだ文学を文学として考え自分の作品にそれだけのものを求めていた。しかし、日本の当時の文学をつくる人たちはそのような文学の使命を一向に感じず、求めようとせず、遊廓文学めいた作品をつくっている。

この煩悶を二葉亭四迷はついに文学の内部で解決する方法を見出すことが出来なかった。そこに、彼の時代の悲劇と彼自身のもののかたからの悲劇とがあったと思う。二葉亭四迷は「浮雲」によって日本の文学のために極めて意義ふかい発足をを行い、ゴリ、ゴリキイ、ガルシン、アンドレーエフなどの作品を翻訳紹介しつつ三十九年には「其面影」四十年には「平凡」と創作の

業績を重ねながら、目前の日本文学一般がおくれていることへの不満のはけくちを、日清戦争後の日本がさらにシベリアへ着目していた当時の国士的な慷慨のなかに見出した。そして、朝日新聞社からロシア視察旅行に赴き、あちらで発病して、明治四十二年五月帰途の船が印度洋を通っているとき病歿した。

二葉亭の悲劇は決して旅の半ば船中でその生涯を終ったことではない。彼の悲劇は、あれだけ日本のために文学をもって働きかける力をもっていたのに、周囲のおくれていたことに本質的には敗けて文学の理想は大きく高く懐きながら、その道から逸れて行った心理のうちにある。通俗の目にすぐ肯ける男子一生の業にうつつたところに悲劇があるのである。



現代の世界の波濤は、二葉亭四迷のこの悲劇を再び案外に多くのところで、若い命の上に反覆しようとしているのではないだろうか。

二葉亭四迷の行うべきであつた義務は、日本の文学の成長を根気づよく支持し、援け、力の限りそのための養いとなる条件をふやして行つて、自分の理想とする文学創造の可能のためにたたかうことであつた。それにくい下つて離れるべきでなかつた。文学は、まぎれもなく男子一生の業として足りてなおあまりあるものであるということをは明かにするべきであつた。文学はそれだけの命と社会的奥行をもつものである。

二葉亭四迷もこの面からみれば、歴史の力に消耗されることを

自身にゆるした瞬間、悲劇の一步をふみ出しているわけである。

現実に面してひるまない精神ということと、何が出ようとも何とも感じず常にそこから自分にとって一番好都合の部分をかすめとつて来る機敏さというものは、全然別様のものである。歴史に働きかける力としての存在ということも、いつも立役者として舞台の真中に華々しく登場しているということとまるでちがう。

科学者が真に科学者であるためには沈着な勇氣と歴史への洞察と人間は結局合理的な生きものであるということへの信賴とを、つよく胸底に蔵さなくてはならない時代がある。科学の世界にだつて、流行というものはある。それが近代の宣伝術というものと

きりはなされない時代性格である。昔錬金術というものがあつて今日の人の目はそれが科学でなかったことを知っているのであるが、それなら何人の努力の成果に立つて、きょうの科学は錬金術の非科学性を明らかにして来たのであつたらう。決して決して錬金術師達の口伝からではなかつた。錬金術が背後の楯としていた中世の宗教の暗い恐怖すべき力と向いあつて、しばしばその恐怖に圧倒されそうになる自分ともたたかいたが、錬金術への疑問を、現実があらわす客観的な真理にしたがつて謙遜に解きにかかつて、おそらくは目立たぬ生涯を硫黄くさい幼稚な設備の実験室で費した無名の何人かの人々の業績の永年の積み積りを、忘却することは出来ないのである。

美しさはそのようなところにもある。そのような歴史への働きかけは一見まことに見事らしくないが、しかも大きい河が河の中にやがてそこに都市の建てられる三角州をつくるとき、どの砂粒がその大きい自然の作業に参加するに余り艶の目立たないただの砂粒であることを自身にとって下らないこととしただろう。

新しい日本の生活というものは、希望とか要望とかいう生やさしいものではなくて、この刻々のうちに木炭切符のなかから砂糖切符のなかから湧き出して来ている現実である。青年の成長力にとつて、下宿の食物は益々空腹を充すに足りないものとなりつつあるその現実から、うそのない新しい日本の姿が立ちあらわれて来ている。

もし青年に新しい日本の担い手としての期待がかけられるのならば、それらのあらゆる現実を落着いて自分たちの経てゆく生活史のなかにうけとりつつ、歴史に消耗されず、そこからめいめいの建設を見出してゆかなければならない、そのような今日の時代の鍛錬が今日の若い世代を、小市民らしい自己偷安に成長した前代人より、立ちまさった客観力も具そなわった生活者にするであろうということ以外にはあり得ないと思える。

青年の精神は豚ではない。くわせば何でもくうものではないであらう。青年の精神はどっさり並べられた空壇ではないであらう。注ぎこめば何でも入る、そういうものではないであらう。

〔一九四〇年十一月〕



# 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十二卷」新日本出版社

1980（昭和55）年4月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

親本：「宮本百合子全集 第七卷」河出書房

1951（昭和26）年7月発行

初出：「法政大学新聞」

1940（昭和15）年7月号

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2003年2月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。



# 生活者としての成長

——二葉亭四迷の悲劇にもふれて——

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 宮本百合子  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>